

二つの本気が淀川水系流域委員会の議論を変えた

尼崎市 細川 ゆう子

残念な報告をしなければならない。12月16日に開催する予定だった集会ができなくなった。私は、委員の任期中水害現場の視察に行き、以来、地元でハイブリッド堤防の必要を訴えてきた。そこへ8月22日の内水による浸水被害が起こった。内水だけでも床上浸水の被害が出ることは、つらい現実だった。記録的な集中豪雨の上に、落雷によって北部浄化センターが停電し、ポンプが25分間止まったことが原因だった。ポンプが止まれば浸水は免れないことは、市の下水道課に聞いたとおりだった。今本先生に基調講演をお願いして、猪名川河川事務所、尼崎市都市整備局、地元の地縁団体、私自身も会員である住民団体に協力をお願いした。

ところが交渉を始めてみると、尼崎市の感触が思わしくない。「8月22日の水害については説明責任がある」と言いつつ、パネリストは遠慮したいと言う。対応を検討すると言ったきり、連絡もない。さらに、地元の地縁団体の長から呼び出され、開催を見合わすように説得を受けた。このあいだまで「確かに、阪急の鉄橋の上流は堤防が低い」と言っていたのに「あそこは安全だ。対策は必要ない」と言う。「これはとても協力してくれそうもない。協力してもらえなければ、300人規模のイベントはできない」と考え、会場をその地縁団体の会館のホールに切り替えた。もう一つの団体には協力を取り付けたので「まあ、50～100人規模なら何とかできる」と踏んだからだ。そこで、委員会の席上でも案内を配った。話はまだ続く。次の日、協力を取り付けた団体の元代表から「パネリストを降りるように勧められた」との連絡があり「開催を再考したほうがいい」と言われた。この住民団体は、尼崎市の80周年記念振興事業「自然と文化の森構想」策定のために集められた住民が立ち上げたもので、尼崎市との協働の活動が評価されて総務大臣賞などももらっているが、地元の社協からは「勝手なことをするな」と、イベントをするたび圧力をかけられている。彼らにこれ以上迷惑はかけられないので、開催は断念した。

住民の意見とは、何だろう。地域のコミュニティが密接だったころは、もとは庄屋とか大地主の家柄の人間が地域の意見をまとめることができた。行政もそういう人たちに住民の意見のとりまとめを依頼し、それがまかり通ってきた。今や町には新しい住民が流入し、それぞれの考えでグループを作り、自由に活動している。たまたま見たテレビの報道によると、河川に関連する住民団体の数は2000以上に及ぶと言う。ダム反対、賛成、河川の清掃、希少種の保護、環境教育など、その取り組みは多岐に渡り、全てを掌握し合意形成するなど不可能だ。かつて住民の代表だった人たちは、ただ国や自治体の意向に同意し、住民のために何をすべきか自分で考えることも行動することもせず、むしろ住民の自主的な活動を阻害するように成り果ててしまった。彼等からいくら合意を取りつけても、住民団体の反対を抑えることはできなくなった。そんな実質の伴わな

い住民代表を育ててしまったのは、他ならぬ行政だ。

淀川水系流域委員会を引き受けたとき、河川管理者は委員に何も要求しなかった。どこぞのやらせ発言問題を起こした省庁とは、大した違いだ。その代わり「地域の特性に詳しい委員」が何をすべきかまったくわからなかった。何より住民の意見を取り入れて河川整備計画を策定するということ自体、河川管理者がどこまで本気が信じられなかった。何十年も、どう反対したって進む事業を止めることなどできなかったのだ。不信が先に立つのは、しかたがないと思う。

けれど、不信などふっ飛ぶ出来事が起こった。中間取りまとめの作業部会で見せられた一枚のペーパー。「破堤による水害が起こるたび、その堤防は頑丈になるが、次は別のところが破堤する。破堤の輪廻から脱却しなければならない」と河川管理者自身が書いたものだった。「河川管理者は本気だ。これは、大変な仕事を引き受けてしまった」と思った。もう一つは、中間取りまとめ。一部のフレーズ「ダムは原則として採用しない」だけが一人歩きして、「淀川水系流域委員会は脱ダムだ」というイメージが定着してしまったが、「自然環境を破壊する恐れが大きい」というフレーズが重要だと思う。河川管理者も河川工学者も、それまでダムのメリットしか主張してこなかった。河川工学者が自らダムにも問題点があると書いたことに、本気を見た。自分を省みず、他人を批判することは容易い。けれども、自分が誇りを持ってやってきたことにも問題があると認めることはとても勇気がいる。

この二つの本気が、淀川水系流域委員会を、違う立場同士の批判しあいではなく、「新たな川づくり」をめざす建設的な議論の場にしてくれた。住民の行政不信、御用学者不信を払拭してくれた。確かに、流域委員会に関わるみんなが、同じ話し合いのテーブルにつけたという手ごたえがあった。この二つの本気に、住民もまた答えなければならない。まず、今までの経験や知識にとらわれず、謙虚に学ばなければならない。そして今までの主張はいったん白紙に戻して、自分で一から考え直すことだと思う。それができないのなら、河川管理者と住民は同じ話し合いのテーブルにつくことはできない。今、河川管理者の住民不信が河川整備計画の議論を困難にしている。住民がどう本気を見せれば、河川管理者は住民不信を払拭してくれるのだろう。淀川水系流域委員会休止問題は、住民にも自らを省みることを求めている。そして、どんな住民と話し合うかが、河川管理者に問われているのだ。